

# 10年前に地元の寛仁親王牌で見せた姿から 今の諸橋愛を想像することはできなかった



弥彦に初のGI・寛仁親王牌が  
やってきたのは2011年。3月  
に東日本大震災があった年だ。

トップ選手108人しか参加で  
きないGI。彼らが持つ肉体、自  
信、強くなりたいがための欲求が  
混じり合って、検車場の雰囲気は  
明るく華やかだけど、緊張感もし  
つかりある。

多数のファンが見にきてくれ  
て、選手たちの気持ちも盛り上  
がった初日。全レースが終わった  
あと、検車場にある売店の前で、  
諸橋愛がぼつんとひとりで自転車  
を片づけていた。10レースを走っ  
た彼は4着失格。帰りの支度をし  
ている最中だった。

こういう時、選手にかける言葉  
は難しい。ありきたりな「お疲れ  
様」と声をかけると、「来年出場  
できる新潟支部の枠は次の代にな  
るだろうから、俺はもう苦しいで  
すよね」とぼつり。ネガティブで、  
意外な返事に、こちらは返す言葉  
が見つからず、首だけを横に振っ

たけど、色白の彼の顔がいつもよ  
り白く見えた。

って、この話、わずか10年前の  
ことなんですよ。

現実には彼の言った言葉通りには  
ならなかった。というか真逆に。  
超負けず嫌いな諸橋の努力、周囲  
のサポートはもちろんのこと、震  
災の影響で、新潟県に避難してき  
た成田和也と弥彦競輪場で一緒に  
練習できるようになった偶然もあ  
ったりして、そのとき33歳だった  
彼の中で何かが覚醒した。6年後  
の2017年に地元記念を初めて  
獲って、グランプリにも出場。今  
も彼は超一流の追い込み選手のひ  
とり。

未来を変えちゃった。

▽弥彦競輪 寛仁親王牌

世界選手権記念トーナメント  
思いつくまま回顧録 第5話

【新潟スポーツ 信氏 忠】

